

う努めねばならない。而して此の種の幼児に就いて特に注意して置くべきは、思春期の頃に至つてこれが著しく昂進して、遂には全く救ふべからざる精神の變態者となることが往々ある一事である。殊にかゝる傾向は、直系たる祖父母及び兩親腦神經病酒精中毒、梅毒等があつて、其の爲めに上述したやうな發作的な變態な動作をして居つたもの

『トブシイ』(二)

文學に現はれたる子供(三十五)

此の白々しい虚言にオフヒリヤは憤然として、トブシイを掴んで烈しく揺ぶつた。「そんな虚言を二度と御言ひでない。」と揺ぶる拍子に今一方の袖から手袋が落ちた。

「さあ如何だ！これでも、リボンを盗みはしない

に、最も多く見られるのである。従て幼児期や少年期が忠實に觀察されてなかつた時には、恰も思春期になつて突發的に、且不治なる程度に於て、發病したやうに觀られることが少くない。これをも以ても幼児期に於ける此の種の傾向の觀察並に適當なる處遇は、最も肝要なことである。(終)

岡田みつ

と言ふのかい。」とオフヒリヤは言つた。

トブシイは手袋の事は白狀したが、リボンの方はやはり強情を張つて盗みはせぬと言つた。

「では、トブシイもし御前がリボンと手袋の事を皆正直に話して終へば、今日は打擲しないで置い

てやるが……」

と言はれて、トブシイは、歎き悔いる風で、リボンと手袋の白状をした。

「では訊くがね、御前此家へ来てから他の品も取つたのだらう、昨日一日勝手な事をさせて置いたから。……もし何か盗んだのなら話しておしまひ、打擲たないから。」

「あのう、イバ様（此家の少令嬢）が首に巻いていらつしやる紅い物を取つたんです。」

「おれを！ まあ！ 呆れた子だね、……その他には。」

「ロザ（女中の名）の耳飾り……あの紅いのを。」

「さ、今往つて兩品とも持つて御出で。」

「あのう、持つて來られないよ。燃えてしまったもの。」

「燃えてしまった！ 何といふ虚言を吐くのだ。

往つて持つて御出で、さもないと打擲つよ。」

トブシイは大聲に泣き喚めいて、持つて來る事は出來ぬと言ひ張つた。

「燃えてしまつたんだ……しまつたんだ。」

「何だつて燃してしまつたのさ。」

「已は悪人だから。何しろ、已は大變悪人なんだ……如何も仕方がないんだ。」

此時イバが何氣なくその室へ入つて來たが、問題の珊瑚の首飾りをちやんと着けて居たので、オフヒリヤが、

「あれ、イバさん、その首飾りを何處から持つて來ました？」と尋ねた。

「持つて來た？ 私、今朝からこゝに着けてゐるのよ。」

「昨日も着けて居ましたか。」

「え、而して可笑しいでせう、昨夜もずつと着けて居たの……寝る時外すのを忘れてね。」

オフヒリヤは不思議に感じて居ると、またロザが出來上つた洗濯物の籠を持つて入つて來て、其耳には珊瑚の耳飾りが搖いで居たので、オフヒリヤは、

「こんな子ッてありはしない！如何したら良いのでせう。」と投げるやうに言つて「トブシイ、何だつてあれを取つたなど、言つたのさ。」

「でも御前様が白状しろつて言ふから……而して已も白状する事が他に無かつたんだもの。」とトブシイは答へた。

「だつて御前、取りもしない物を白状しろと言ふものがね……そんな事をすれば、矢張、虚言になるではないか。」

「そうかね。」とトブシイは平氣で不思議さうな顔をした。ロザはトブシイを憎らしさうに見て、「此奴には眞實まことなんといふものは皆目かいく無いんだ。

私が、主人なら血が出る程、打つてやるけれど……それ程な目に遇はせるけれど……」

イバは窘めるやうに、

「そんな事を言ふものでは無い。そんな事聴くもいやだ。」と言つた。

「まあ、御嬢様は御優しいので、黒奴くろんぼの待遇あしらいかた法な

にか御解りになりませんが、どうしたつて彼奴等はひどく答つより他に途は無いので御座います。」

「ロザ、もう御止し。もうそんな事は言はずに置いて御くれ。」と言ふイバの眼は鋭く光つて顔の色も紅が汐して居た。ロザは其見幕に懼れて黙つてしまつた。オフヒリヤが。トブシイの悪業を敷衍して話して居る間、イバは困つたやうな氣の毒さうな風をして居たが、臆て可愛らしく、

「トブシイや、何故物を盗むの。こゝの家で御前これから世話になるのだからね、……欲しいものがあるなら私のを上げて宜いから、盗むんではないよ。」と言つた。

之はトブシイが生れて初めて耳にした親切の言葉であつた。その優しい調子と態度が、妙にトブシイの荒あびた心に響いて、涙かと思はれる一滴がその丸いギラ／＼眼に一寸光つたが、すぐ後は、例のいやな笑ひ顔になつた。暴言より聞いた事の

ないトブシイには、親切の言などといふものが世にあると思へないので、今のイバの言葉も、意味の解らぬ可笑しな事に考へて少しも信じなかつたのである。

此トブシイを如何したら宜いか、とオフヒリヤは頭を悩ました。普通の子供を育てる方法は、トブシイには適せないので、時間を取つて徐ろに考へやうと思つた。オフヒリヤはセント・クレアに。

「あの子を答たすには、始末が着きさうもないのですかね。」

「氣の済むまで答つたら宜いでせう。全權を委ねますから。」

「子供はどうも答たないといけませんよ。答たないで育てるなんといふ事は聞いた事がない。」

「ですから好きなやうになさい。たゞ一つ御注意申す事がある、それは此子は火棒ひかきで打たれたり十能でも火箸でも手當り次第の物で叩き仆され

て來たのですから、そんな事には馴れて居るのですよ。ですから、あなたの打擲が利目きめがあるやうにするには、餘程ひどく力を入れなくては。」

「それなら如何したら宜いでせう。」

「難むづかしい問題になつて來た。立派な答が出來るといゝのですが……鞭がなくては御まよしていられない人間は如何したらよからう。其鞭も効を奏さないとなつたら、さあ如何しやうといふのですか此地方では珍らしくない問題なのです。」

「私も如何してよいか分らない。こんな子は見た事がありません。併し、まあ辛抱して出來るだけ世話をしてみませう。」

と言つて、オフヒリヤは熱心に根氣よくトブシイの面倒を見た。定まつた仕事を定まつた時間だけさせる事にして、読み方と縫ひ方とを仕込んだ。

讀方は記憶がよくて文字を瞬く間に覚え、容易な本を直きに讀み得るやうになつた。針仕事の方は

少し骨が折れた。何せよ、トブシイは猿のやうに

チヨコ／＼動きまはる落付きのない子なので、縫物に閉ぢ込められるのが一通りならぬ苦痛であつた。それで針を折つて内所で窓から捨てたり、壁の隙間へ落したり、糸を切る、絡こらかせる、汚す、時には目を盗んで糸巻ぐるみ捨てる事もあつた。その舉動が、専門の手品師のやうに敏捷であるし、顔色を動かすことが極めて巧みなので、オフレリヤもトブシイの故意にする所業とは思ひながら、その場を見届ける事が出来ないのである。

トブシイは、此家の評判者になつた。人真似、戯おど謔顔、あらゆる可笑しい事をするのが上手で、踊る、轉ぶ、攀る、唱ふ、口笛吹く、物音を真似る……かやうの業には無盡藏の技倆を持つて居た。

此子の暇の折は、家内中の小黑奴がその周圍に集まつて、皆口を開け放して、その所作に眺め入るのであつた。その中にはイバまでも入るので、オフレリヤが心を痛めてセント・クレーヤに忠告す

ると。

「あゝ棄て、お置きなさい。却てイバの利益たになるでせう。」

「あんな悪い子供が……イバにどんな悪い事を教へるかも知れないではありませんか。」

「大丈夫。他の子供にはそんな事もあるかも知れませんが、イバなら大丈夫、悪い事は蓮の葉から露が轉ろげ落ちるやうにあの子には染み込む心配なし。」

「さう安心してゐて宜いのですか。私の子だつたら、トブシイなんかと遊ばせませんよ。」

「あなたの子はあなたの勝手ですが、私の子は遊んでも差支ないので。イバが悪くなるなら疾くの昔悪くなつて居まゝ。」

トブシイは始のうちは女中達に嫌はれ輕視さげすまれたが、暫くすると皆その態度を改めなくなつてはならなくなつた。トブシイに無禮を加へたものは、必然きつと、何か困るやうな目に遇ふと定つて居たので。

耳飾り其他大切な飾り品が紛失するとか、着物が全く着られぬやうになつてしまふとか、思ひもかけず熱湯の桶の中へ轉げ込むとか、盛装して出る途端に汚水を二階から注がれるとかの災難が起る度にいくら穿鑿しても悪戯者の知れた例がなかつたトブシイが呼び出されて取調らべられる事も一度や二度では無いのであるがいつも罪無ささうに澄し返つて後暗い風を少しもしなかつた。家内中誰一人當の犯人を知らぬ者は無いのであるが、微塵も證據がないので、オフヒリヤも手を下しかねて其儘にしてあつた。而して、またその悪行が甘く時機を見計らつて行はれるので、例へばロザやジェーンなどの仲働きに對しては、二人が奥さんの御機嫌を損じて居る時にやられるので、二人とも訴へて行く處が無いのであつた。それで家内中トブシイには關涉せぬが得策であると悟つて、全く放棄してあつた。

トブシイはなんでも手業には敏捷で活潑で、教

へられる事を驚くほど速に覺えた。二三度教はつただけで、オフヒリヤの寢臺を批難のしやうも無い程、立派に整頓するやうになつた。あれ程巧い臥床の上被を伸ばし、あれほど宜い工合に枕を置きあれほど上手に掃いたり拭いたりする者は無いと思はれたが、それはトブシイが氣の向いた時だけで……しかもその氣の向く事は終始ある譯ではなかつた。オフヒリヤが三四日も根よく監督をして、もう手放しでさせても宜かろうと、自分の用事に取掛かると、トブシイは一時間でも二時間でも、仕たい放題の亂ちき騒ぎを必然した。臥床を片付ける代りに、枕の袋を外して自分の頭を枕に打付けて見たり、寢臺の柱に攀ち登つて頂邊から頭を下にぶら下けて見たり、敷布や上被を室中に散亂したり、長枕にオフヒリヤの寢衣を着けて唱つたり口笛を吹いたりしながら種々の所作を鏡の前でしたりするのであつた。

ある時、オフヒリヤが如何した事か、抽出しに鍵

を差込んだまゝにして置いたので、トプシイはオ
フヒリヤの大切な赤い縮緬の肩掛を持ち出して、
頭巾のやうに頭に巻き付けて大得意で鏡の前で演
技をしてゐる處を見付かつた。オフヒリヤはもう
愛想を盡かして、

「トプシイ、一體どうしてそんなのだよ。」と言ふ
と

「知らないや。己は心が悪いからなんだろうよ。」

「如何な目に逢はせたらいいか分らない。」

「あのう、御前様己を答たなければ駄目だ。以前
の御主人は始終答つたよ。答たれなくちや働か
ないやうになつてしまつんだ。」

「御前を答ちたくは無いが……しやうとさへ思へ
ば、御前何でもよくするくせに、何故爲ないのだ
らうね」

「あのう、答たれつけて居るから。答たれるのが
効果があるんだろう。」

それで、オフヒリヤがいよゝ／＼答つと、トプシイ
は泣いたり叫喚いたり、詫びたり、呻吟したりし

て騒ぐと定まつてゐたが、三十分も経つと、露臺
の突き出た處へ棲つて、大勢黒奴の子供を聚めて、
オフヒリヤニ打たれた話を馬鹿にしきつた調子で
語りきかせるのであつた。

「オフヒリヤ様の打ち方なんか……蛟一疋あれでは
殺せはしない。以前の御主人は眞のやり方を知
つて居たよ。……あゝいふ風にしなくちや。」

トプシイは自分の悪業を偉大い事柄とでも思ふら
しく、大袈裟に吹聴するのが常で、小供を相手に
「おい、御前達、知つて居るかい。皆罪があるン
だよ。誰でも彼でも。白人も罪があるンだとオ
フヒリヤ様が仰つたが、黒奴の方がもつと罪が
多いンだと思ふな。……だがその中でも、己に叶
ふものはあるまい。己なんかもう悪人で／＼誰
も手の着けやうが無い位なんだ。以前の御内儀
さんだつて年中己に怒り通しだつたけ。必然已
や、世界中で一等悪い人間かも知れない。」

と言ひながら、一つ宙返りをして今一段高い處へ
登つて、得意に四方を見渡すのであつた。(完)